



Title	標準シリーズアレルゲンによるパッチテスト成績
Author(s)	駒村, 公美
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/41113">https://hdl.handle.net/11094/41113</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"&gt;https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> >大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 こま 駒 むら 村 ひろ 公 み 美

博士の専攻分野の名称 博 士 (医 学)

学 位 記 番 号 第 1 4 0 5 0 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 10 年 5 月 29 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 標準シリーズアレルゲンによるパッチテスト成績

論 文 審 査 委 員 (主査)  
教 授 吉川 邦彦  
(副査)  
教 授 多田羅浩三 教 授 森本 兼曩

## 論 文 内 容 の 要 旨

### (目的)

接触皮膚炎は、皮膚に接触する外界物質の刺激やアレルギー反応により生じる皮膚炎である。患者の生活習慣や職業と密接に関連する疾患であり、その治療と予防には、社会医学的取り組みも重要である。そのため、頻度の高い接触アレルゲンとしての物質が、ヨーロッパ標準シリーズ、北米標準シリーズ、日本標準シリーズとして、それぞれ選定されている。標準シリーズアレルゲンの陽性率は、時代により、国、地域により、異なるため、陽性率の統計的解析を行い、適宜アレルゲンの見直しを行うことが、重要である。今回我々は、大阪という都市部の患者多数について、標準シリーズのアレルゲンを用いてパッチテストを行い、年齢、性別、年次別変動、職業、アトピー素因、皮疹の部位との関連について、検討した。

### (方法)

1992年10月から1997年5月までの期間に、大阪大学医学部皮膚科を受診し、接触皮膚炎を疑われた、411名の患者、即ち、男性101名、女性310名を対象として、Trolab® のヨーロッパ標準シリーズまたは日本接触皮膚炎学会の日本標準シリーズのアレルゲンを、Finn chamber®, scampor tape® を用いて傍脊椎部皮膚に48時間閉鎖貼布し、除去30分後と24時間後にICDRG (International Contact Dermatitis Research Group) 基準に従って判定し、+以上を陽性とした。

### (成績)

標準シリーズの上位10位のアレルゲンおよびその陽性率は、金チオ硫酸ナトリウム12.5%、硫酸ニッケル11.9%、ウルシオール11.7%、塩化コバルト11.4%、重クロム酸カリウム9.7%、香料ミックス7.5%、チメロサル6.7%、ペルバルサム5.1%、パラフェニレンジアミン4.4%、チウラムミックス3.2%であった。

金は、60代男女に多く、それぞれ50%、35.7%、また、会社経営者に多く、33.3%であった。ニッケルは、金属小物

を通しての感作が多く、女性のニッケル陽性率14.2%は、男性の陽性率5.0%の2.8倍と、男女差について、欧米に似てきたことがわかった。また、10代女性に多く、26.3%、耳、頸部で、それぞれ41.2%、26.5%と多かった。ウルシオールは、山林の漆や、漆塗料によるのみならず、マンゴーなどうるし科の輸入果物によるもの、うるしと交叉反応を示すプロポリスなどの健康製品を外用して皮膚炎を生じた例がみられた。また、ウルシオールは、調理師にも陽性率が高く、50%であった。コバルト、クロムの接触源は、多岐にわたる。コバルトは、従来から指摘されている通り、日本人に陽性率が高い特徴的な結果を示した。クロムは、従来、男性に多いとされていたが、今回は、60代、70代、50代女性に多く、それぞれ28.6%、25%、20%であった。女性の香料ミックス陽性率7.4%が、男性の陽性率7.9%と、ほぼ同じであったのに対し、女性のペルーバルサム陽性率4.2%は、男性の陽性率7.9%と比較して、低値であった。チメロサルは、医療従事者に多く、40%であった。パラフェニレンジアミンは、毛染めの成分であり、理、美容師に多く、40%で、2位のヘルパーの12.5%を大きく引き離していた。チウラムミックスは、ゴムの添加物であり、調理師15.4%、ヘルパー12.5%、医療従事者7.4%と、ゴム手袋、ゴム長靴を職業上よく使用する者に多かった。ネオマイシンは、医療従事者に多く、11.0%で、職業上感作された例の他、眼困、耳に、外用剤、点眼薬、点耳薬として使用して感作された例も多かった。

なお、年次別変動、アトピー素因の有無は、陽性率に大きい影響はなかった。

#### (総括)

接触皮膚炎の原因決定には、必要かつ十分なアレルゲンを用いて、パッチテストを行うことが、必要不可欠であるが、診察現場において実施できる数には限度があり、有用なアレルゲンセットに対するニーズが高い。いかなる組み合わせが最も有効であるかは、各々の時代、国、地域の多くの症例について統計的解析を行い、決定する必要がある。今回の検討では従来の知見とはやや異なる結果が得られた。即ち、金が、最も高い陽性率を示し、また、ウルシオール、チメロサールの重要性が、再認識され、金と60代男性、ウルシオールと調理師、ニッケルと耳の皮膚炎、チメロサルと医療従事者、パラフェニレンジアミンと理・美容師に、強い関連が認められ、歯科金属、輸入果物、ピアス、水銀化合物、染毛剤と、皮膚炎との関連が示された。よって、スクリーニング用のアレルゲンセットとしては、日本標準シリーズのアレルゲンを用いるか、ヨーロッパ標準シリーズに、金、ウルシオール、チメロサルを追加すべきと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

接触皮膚炎は、皮膚科外来患者総数の約20%を占め、皮膚科の日常診療において最も重要な疾患の一つである。接触皮膚炎には、刺激性接触皮膚炎とアレルギー性接触皮膚炎があり、後者の原因は、化粧品、外用剤、金属、植物、染毛剤など、生活環境や職場環境で接触する種々の微量化学物質が原因である。よって、原因物質の確定のために、パッチテストを行うことが、診断、治療、生活指導上、不可欠である。

本研究は、大阪大学医学部皮膚科外来を受診し、接触皮膚炎を疑われた患者411例に、パッチテストを行い、効率的な診療のためには、スクリーニング用のアレルゲンセットとして、いかなる組み合わせが最も適切かを明らかにしたものである。

本研究により、現代日本の代表的な大都市において、パッチテストを行う場合、日本標準アレルゲンシリーズを用いるべきであるが、未だ市販はされていないため、ヨーロッパ標準シリーズを用いる場合には、追加アレルゲンとして、金、ウルシオール、チメロサルを追加すべきであることを明らかにした。適宜アレルゲンセットの見直しを行い、最適化する重要性を指摘した点で、臨床上価値ある知見であり、皮膚科学的に学位授与に値するものと評価される。